

だとホッと一息ついた。

ナホトカを目指し窮屈な苦しい貨車生活。待ちに待ったダモイ、なんとなく楽しく正月と盆が一緒にくると語り合ったものだ。

ところが、ナホトカで中隊はバラバラになり、私は交替要員ということで、ここでさらに一年有余ラポーチラポーチで追い回される羽目になった。

本当のダモイは二十四年九月三十日。ナホトカ出帆、十月三日舞鶴上陸、復員となった。

我が青春は

シベリア捕虜の地獄にいた

岩手県 川村 富 弥

神州不滅の皇軍が無条件降伏とは、夢にも知らざる出来事であった。

私は山神府七二二部隊から関東軍直轄二二五師団一四九連隊本部砲兵隊電気技術下士官として転属し、

終戦際に山神府からチチハルに移駐した。チチハル到着後ある日、チチハル兵器廠に出張帰営したら、すでに連隊本部は移動、留守番兵五人くらい。間もなく兵舎外に爆弾炸裂音、驚いて舎外に飛び出した途端に機銃掃射を受け、あわてて逃げまどううちにタコつぼ穴に落ちた。おかげで生命は助かったのです。

移動部隊名不明の無蓋貨車にまぎれ乗車す。歩く満人は竿の端に赤布切れをつけているのが不思議に思う。やがて明け方のハルビン駅に着いて驚いた。限りないほどの軍人、地方人の黒山の集団、阿鼻叫喚、地獄絵図とはこのこと。日本は戦争に負けたのだ。血気の多い将校ははやる心で戦わずして負けるものかと、ソ連軍に一撃を与えようと白鉢巻き隊を編成、来攻のソ連軍に備えては見たもの、結局は武装解除となり、ソ連軍の指揮下に完全なる捕虜姿となったのである。その後どこを引き回され歩いたのかは定かでない。忘れ去ることのできない幼児の死骸の山、軍馬は湿地帯に落ち身動きもできぬまま死して腹はふくれ、臭気ただよい、表現の言葉もないありさま。

その年の十月ごろ、野営收容所將校下士官三百人くらいで編成されソ連労働部隊に属し、ハルピン南岸区旧満鉄社員寮に起居させられ、日本国からの略奪物資を満鉄貨車からシベリア鉄道貨車への積み替え作業をする。作業中に、その物資を盗み中国人に売却、日本紙幣を手にする。ソ連監視兵に対しプレミアヤを支払うので、堂々と目的は達成されたのです。

やがて翌年三月末の月夜の晩、突如と私物を持って全員外に出よと通訳より伝達。ソレッ、うわさのごとく奉天集合帰国らしい。盗品売りさばきでこの日を期して貯えた日本紙幣である。敗戦の惜しさも薄らぎ、考えは祖国に飛ぶ。下弦の月はハルピン街を照らし、ネコの子一匹通らぬ戒厳令がしかれているのである。

だれ言うとなくシベリア行きか、稲妻のようなひらめき、悲壮なうめき声、いや奉天行きかもしれぬ、考えは交錯する。監視兵のダワイの掛け声でゾロゾロ動き出したのだ。不滅の日本軍隊集団、哀れなる魂の抜けがら集団、横に並んで歩く人は、どこのだれなのかもわからぬ。ソ連軍が突如編成した將校下士官だけの

混成集団である。話合う気力もない。ハルピン駅には赤色の貨車は投光器に照らされ待ち受けていた。

貨車は二段装置、入り口は小用に必要なだけ開き、鉄線で固く結ばれ、上段の四隅は小さな窓がある。乗車完了、静かに貨車は動き出した。果たして行く先は奉天か、シベリアか、考えは交錯する。だれ言うとなくハイラル方向に断定された。

よくもだました。よし逃亡だ。私はベンチに米二升くらい。左の友は岐阜県出身在満者、満語堪能者石原伍長、米二升、右の者は奈良県出身川合乙幹軍曹米一升、乾パン四袋所持。列車は登り坂、速度は遅い。ベンチが鉄線に食い込ませつな、ダタダッ機関銃の音だ。列車は急停車。やみに聞こえるのは深夜に機関車の蒸気音だけ、不気味な静寂である。息を殺してしばらく待つこと数分間。露語と日本語の声、やや間において通訳は大声で逃亡者が二人射殺された、逃亡計画者があるなら中止するよう叫び回ってくる。我々の計画はこのことで万事中止。

眠れぬ興奮状態の朝明けとなり、支線に停車。間も

なく通訳同行で各車ごと点検、車内に入り、何かわめき声。上段窓側の日本軍人三人を引きずりおろして連行、目隠しをされ、二十メートルくらいの距離から射殺する。理由は、下痢のため窓を開け鉄線を切断、用便をした。逃亡計画者と見なされたのである。その後食事として生キヤベツだけが配られる。だれも食べる者はいない。昼食分として馬糞のような黒パンだけ。

ソ連の列車は一たん停車すると半日以上走らない。どこまで来ているかは不明である。たどり着いたのはソ満国境のクエブシエフカ。宿舎はれんが工場の窯の中である。電気もない。昼でも真つ暗である。冬眠熊と一緒にいる。

何日か経ていよいよ点灯設備に入る。日本の家庭電圧は百ボルト、ソ連は二百ボルトのため、日本製の電球はそのまま通用は不能なため、私は水抵抗調節し点灯したため、一躍インジネールとなり、大変重宝がられ、その後れんが工場作業場では軽労働の機械給油係で大分助かったのである。

翌年春ころから思想革命を狙う共産教育の日本新聞

が配られ、シベリア捕虜民主運動が芽生え、労働の汗の力で民主社会建設へと発展したのである。そのころは有刺鉄線を二重に張り、夜間投光器を照らして監視しているのである。

作業は伐採、炭鉱、鉄道、建築とさまざまである。

私は二年目の冬は伐採班に回り、いよいよ空気も凍る厳寒の深山に入る。雲つくような大森林、丸太を積み重ねた宿舎（ラーゲリ）寝台は丸太を並べ、乾草を敷きごろ寝。朝五時に起床、黒パン一切れ、麦スープ、携行昼食は黒パン一切れ、ニシンの塩漬け、それにおおいかぶさるノルマ責め。栄養失調患者、病人、死者続出、シラミの繁殖、死者のむくろは別棟の小屋に積み重ね、雪解けの春を待つのである。この世の地獄絵図とはまさにこのことと思う。

民主運動は日増しにたけり狂い、階級闘争に発展、日本人が日本人を精神的苦痛の死の境地に追い込んだのである。

ある深山ラーゲリにて夜の出来事。民主運動研究グループの一人がカンパニヤ対象者になり、反発をして

われこそは真の民主主義者なりと、自分の左人指し指をタポール（おの）で切断、まさに狂気の沙汰であった、千葉県出身者。朝から晩まで団結の歌、赤旗の歌と悲壮な叫び声を張り上げ、作業現場に向かう。

ライチハに移動し、過酷労働は薄れ、給与も改善された。今考えて見るに、食糧の不足、過酷労働、厳寒、民主運動のテロルによって多くの死者が出た。

シベリア抑留体験記

神奈川県 鈴木重雄

私は北支派遣軍より終戦直前、満州龍江省白城子飛行場付近の警備のため駐屯し、八月九日ソ連の対日宣戦布告で、空襲を受けました。

その直後、師団は前線縮小のため朝鮮南下の途中、新京駅構内で移動停止され、武装解除されたのです。第八労働大隊を建国大学で編成。

以後足かけ四年、チタ（チタ州）とウランウデ（ブ

リヤート共和国）の州境のハラグリーンというシベリア鉄道の小さな駅に下車、その後東京ダモイと称して、転々と移動しながら作業をしました。そして昭和二十三年六月、無事に帰国したものです。

昭和二十年

八月二十五日西へ行くか東へ行くか、汽車は一望千里の広野を走る。我々は一体どうなるのかという疑心暗鬼でいっぱいだった。

八月三十一日に国境守備隊の拠点、黒河に到着した。街は砲撃で惨たんたる廢墟と化しているではないか。黒竜江の対岸ソ連領ブラゴエシチェンスクを四十両連結の貨車が出発したのは、晩秋の寒い夜だった。この夜が明ければ私たちの運命が決定するのだ。

貨車は時折不気味な汽笛を鳴らしながら暗黒のシベリア平原を北へ北へと向かって走り続ける。車内は身動きも楽でないし、照明もなく、退屈した兵隊の吸うたばこの火だけが赤く光る。窓の外は星明りで、ほの明るく、北極星が際輝いて見える。

一行三千人の部隊がどこへ移動するか不安でいっぱい